

標本の搬入が続く

事務局



杉本順一氏貝類標本



板井隆彦氏淡水生物標本

平成 15 年度から静岡県企画部より受託してきた静岡県自然学習保存事業も、今年で 7 年目を迎えました。施設の名称が『静岡県自然学習資料センター』に改められ、標本室もこれまでの 3 倍に拡張されて 1 年が経過しましたが、収集される標本は、どんどん充実してきています。

昨年、会報 22 号で報告した、土 隆一氏貝類化石コレクション、志村義雄氏シダ植物コレクション、寺田 徹氏貝類コレクションの搬入後、新たに、杉本順一氏貝類コレクション、澤田 威氏海藻コレクション、板井隆彦氏淡水生物コレクションが搬入されました。

杉本順一氏貝類コレクションは、約 3 万点余です。故杉本順一氏は、植物の研究家として著名で、「静岡県植物誌」などを発刊されていますが、貝類の収集家でもあったことはあまり知られていなかったようです。杉本氏を知る方は、口々にそんなこともしていたのと、びっくりしていました。これらの標本はご遺族の方から県へ寄付したいとの申し出により我々が搬入したのですが、長期にわたり倉庫に保存されていたためか、一部虫やネズミによる被害が見られました。標本の内容は、海生の貝類のほか、カタツムリなどの陸生の貝類や淡水棲の貝類も含まれ、その採集地も、日本や世界各地で自ら採集されたものを初めとして、購入されたものも含まれ充実した標本です。これらの標本がそれぞれ小箱に入れて分類整理されており、みごとにコレクションとなっています。ただ、残念なこ

とに、整理された記録カードやノートが紛失しており、これからの整理に相当の時間がかかりそうなのが悩みの種です。

澤田 威氏海藻コレクションについては、詳しくは本会報のコレクション紹介で報告しますが、国内有数の海藻の研究者の澤田氏が長年にわたり、主として県内で収集された海藻の標本約 2500 点余で、台紙にきれいに貼られた完成標本とともに、自費出版された「駿河湾西岸を主とした原色海藻図鑑」とともに、海藻関係の図書も寄付いただきました。

板井隆彦氏淡水生物コレクションは約 1 万点余。板井氏が静岡県立大在籍中の 40 年余に調査、収集された淡水魚や淡水生物の液浸標本です。2 階の標本室を 2 つに区切り、中量棚を並べ整理しながら運び込みましたが、半端でない膨大な量のため、入りきらず 1 階にも分散して保存することとなりました。なお、標本以外にも多くの書籍や今後の整理のための消耗品なども運び込まれました。今後板井氏自ら整理にあたることとなっています。

以上、昨年だけで 6 コレクション約 6 万点の標本が資料センターに集められました。昨年度、拡張したばかりの標本室も、すでに 3 分 2 以上標本で埋まりました。新設した、脊椎動物・貝類標本室にいたっては、すでに満杯状態になっています。近い将来また、標本室を拡張する必要があります。

総会記念講演

フタバズキリュウの発掘

—今、博物館に何が問われているか—

群馬県立自然史博物館館長 長谷川善和氏

編著 柴 正博



この文章は講師の長谷川善和氏の講演内容を要約したものです。長谷川氏は、国立科学博物館の研究員を経て横浜国立大学の教授となられ、退官後は群馬県立自然史博物館の館長を勤められておられます。専門は古脊椎動物学で、ナウマンゾウや日本の哺乳類など中心に現在までに15,000点の脊椎動物化石を発見されています。

静岡県の脊椎動物化石

静岡県では、西部の石灰岩地帯の裂罅堆積物から人類も含めた古脊椎動物化石が多く発見されている。私は、学生時代からそれらの発見にかかわっていて、その中には三ヶ日の石灰岩からヒグマの大腿骨、栃窪ではワニとシベリア型のオオカミの化石、浜北からは7～8頭分のトラの骨化石が発見されている。

自然史博物館のおかれている問題

「今、博物館に何が問われているか」というテーマであるが、群馬県の事情ではなかなか難しい。現在、地方自治体は公共事業のあり方を検討していて、群馬県でも新しい知事のもとこれについて委員会ができ、一先日自然史博物館に視察が行われた。

博物館などの施設は、集客や利便性など考慮されずに、県の地域のために建設される場合が多い。また、建物の建設は、その中身や運営に関するテーマや機能、維持費などの業務とは無関係に設計施工される場合も多い。そのため、設置後に集客率や経費のみで公共事業として低く評価されてしまう。自然史博

物館の評価は、本来、標本点数や学芸員の研究内容、および教育活動などにあると思うが、何万点の標本よりも文系博物館のひとつの重要文化財のようなものが一般にはアピール力があるのが現実である。

現在、博物館ではその管理を、意味も理解させずに指定管理者制度に移行する動きがある。一般の方に自然史博物館の意義や活動を理解してもらいたいが、地学と生物分野ではアピールできる「もの」を見つけるのが難しい。

クビナガリュウの発掘

昭和43年(1968年)に、当時福島県立平工業高校の2年生だった鈴木直君が、久ノ浜で化石採集をしていて、アンモナイトやサメの歯化石に混じって骨の化石を発見した。鈴木君はこのことを、この地域に分布する双葉層群白亜紀層のアンモナイトを研究していた国立科学博物館の小島郁夫博士に連絡した。そこで、小島氏と私は鈴木君の案内でその現場を見に行き、いろいろな骨があることから、この化石が一個体分のものがバラバラにならず埋没したものと確信した。次の年に石屋さんを雇ったり、自前で土日に出かけて行って、頭骨、脊椎骨、骨盤、左右後ひれ足などを発掘した。発掘したもののクリーニングを進めながら、次の発掘資金を得るため、学会や博物館ニュースなどに報告し、「フタバズキリュウ」と命名した。

幸い朝日新聞から資金援助を受け、昭和45年11月に第2次発掘を行った。この発掘では近心側の脊椎骨と左右前ひれ足、胸骨、肋骨、腹肋骨などを発掘し、クリーニング後に骨格復元を行った。

フタバズキリュウの正式な記載は、発見から40年近くも過ぎた2006年によようやく行えた。その論文では、フタバズキリュウはエラスモサウルス類の新属新種として、*Futabasaurus suzukii*として命名した。

水窪 アンモナイト探し自然観察会

三宅 隆



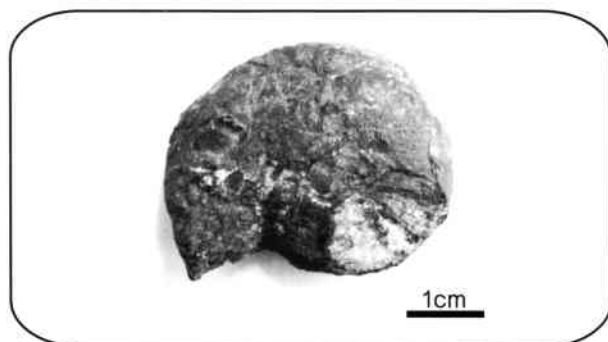
うぶかた
静岡大学生形先生の説明を聞く参加者



アンモナイトを探しながら沢を登る

静岡県には、アンモナイトの生息していた白亜紀に堆積した地層が赤石山地に広く分布しているが、それらのほとんどは深海底が隆起したところであり、アンモナイト化石の発見は今までいくつかの不確実な報告以外ほとんどなかった。しかし最近、自然博ネット会員の宮澤市郎さんにより天竜川上流の水窪付近でアンモナイト化石が発見され、地学雑誌にも水窪付近でのアンモナイト化石の発見が報告された。静岡県産のアンモナイトの標本はきわめて少なく、当自然博ネットでも、その標本を得たいと考え、自然観察会を兼ねての予備調査を実施することとした。

3月29日、参加者10名は、静岡駅を2台の車に分乗して出発。3時間ほどかけて水窪についた。初めに、水窪桂山の「カタクリの里」を見学する。入口には、大きなカキの化石のブロックが置いてあり、中の雑木林の斜面には、可憐なカタクリの花が沢山咲いていた。その後、水窪の奥にある白亜紀の地層で化石を探しながらの観察会を行った。宮澤さんの案内で白亜紀の地層のある森の中を、沢沿いに登っていった。崖から転がり落ちたような石や、化石のありそうな石を見つけてはハンマーで割って確かめるがそう簡単には見つからない。その辺が素人の悲しさで、おなしく石をたたく音だけが響いていた。宮澤さんと静岡大学の生形貴男先生は、さらに稜線に近い露頭まで登っていった。残った会員は、途



宮澤氏が発見した水窪産アンモナイト

中で見つけた大きなカキの化石のブロックを運びながら、昼食のためほとんど手ぶらで山を降りた。しばらくすると、宮澤さんと生形先生が、重そうにリュックを担いで降りてきた。中から石がゴロゴロ。いくつか割ると、「三角貝や二枚貝、カキ」の化石がいくつも出てきた。残念ながらアンモナイトの化石は出なかったが、生形先生の説明や、以前宮澤さんが発見したアンモナイト化石を見ながら、参加者は、はるか1億年前のロマンに浸ることができた。記念として、それらの貝化石をもらい、自分では見つけれなかったものの、素晴らしいお土産にみな喜んでた。

その後、脚の病気が治るといわれている足神神社で地層を見学、周辺の沢でカワガラスや斜面にニホンカモシカを見つけたりした。この観察会は終了したが、今後もっと詳しい地質調査を実施し、静岡県産のアンモナイトの標本収集を実施していけたらと思っている。

御殿場湧水めぐり

及川 忠広



工藤さんの説明を聞く参加者



水神公園内の湧水箇所の見学



水神公園の池



黄瀬川を見下ろす所にある双子・水神湧水

4月12日、NPO自然博ネットの主催で、御殿場・湧水巡りを行いました。当日は天候にも恵まれ、暖かな陽気のもと、満開の桜や菜の花も楽しみながらの観察となりました。案内者は、前回の三島・清水町の湧水巡りも案内して下さった工藤周一さんです。

御殿場は、西から富士が迫り、東から箱根の迫る、東西に長い地域です。国道、東名高速、御殿場線なども通る交通の要所ですが、さほど都市化も進んでおらず、田畑と住宅とが混在する里山の風景を残す土地柄でもあります。御殿場の湧水群は、御殿場市内の小学校で配布される郷土読本でも紹介されており、当地では古くから親しまれていたようです。

点在する泉を訪ね歩いたので、順を追って記しましょう。

中清水・水神公園

畑や住宅地の中、フェンスで仕切った池があります。上の水神、下の水神、それぞれの

泉から流れ出た湧水です。お堂や祠などもあり、信仰の対象ともなっていたようです。水温は13度ほど。参加者の皆さんは、コップで湧水をすくって味見も行いました。

一方、池の方には、キンクロハジロがまだ数羽泳いでいました。ご近所の方からは、畑の中に掘られた井戸についてもお話をいただき、やはり水温は夏でも冬でも一定とのことでした。

沼田・不動池の湧水

近年、名水の噂を聞きつけてやって来られる方も増え、周辺が整備されたようです。畑の一角にある池から、とうとうと清水が流れ出しており、タンクに詰めて持ち帰る方が並んでいます。不動池の名の通り、池の中心には不動明王の石仏が安置されています。

位置的には、黄瀬川を挟んで東側になります。そして、黄瀬川の川底よりも数mは高い場所となります。富士山への降水が地下浸



双子・水神湧水で電気伝導度を測定

透し、それが水脈となって湧水となっているならば……黄瀬川よりかなり深い地下をくぐって湧いていることになります。

この辺りの不思議を会員たちで取り沙汰していると、ご近所にお住まいだとおっしゃる方が、不動池よりも高台の家の庭でも井戸が掘れるとのお話をして下さいました。この辺りの地質構造は、まだまだ不思議なことがあります。

沼田・中島の湧水

不動池とは黄瀬川を挟んで西側となります。私有地の一角のようですが、散策者のために整備中の様子でした。直径は3メートルにも満たない小さな池ですが、その水源を考えるとやはり不思議です。どこからやってきたのか、ニジマスが一尾泳いでおり、参加者たちを驚かせました。

二子・水神の湧水

田の一角にある泉で、大きさ、湧水量も目を引きます。泉の底の藻がたえず揺れているほどの湧水があり、水路から下流の田へ向かって流水があります。泉から流れ出す水路には梅花藻が茂っており、小さな白い花も観察できました。

この泉は、農業用水としても利用され、水神信仰と共に、時折、地元の方の清掃もなされているとのこと。二子の湧水は、黄瀬川の東側になります。また、沼田の湧水群同様、黄瀬川を見下ろす河岸で湧いています。黄瀬川を見下ろす高台での泉は、ちょっとした奇景でもあります。

ここで工藤さんが、湧水の水質などを測定するための方法を披露して下さいました。まずは、サンプル取水のためのビンが登場します。ガラスでは割れてしまうことがある、とのことで、プラスチックの空きビンを利用



駒門風穴入口

した手作りの装置です。水深の極端に浅い水たまりでもサンプルが取れるよう、重心も工夫されたとのことでした。

湧水であるのか、そうではないのか……その判定は、水温と水の電気伝導度の数値で行います。やはり二子・水神の湧水においても、水温13度、地下をくぐった湧水であることが判定できました。

二子・水神の湧水から下流へ歩き、御殿場泥流の堆積が見られる露頭も観察しました。この一帯は広く御殿場泥流で覆われていますが、東側からは箱根火山噴出物も迫っていた地域でもあります。その境目の辺りが湧水現象の鍵となるのかもしれませんが。

駒門風穴

湧水群の観察のちは、陸上自衛隊・駒門駐屯地近くの駒門風穴も巡りました。御殿場は広く富士山からの溶岩に覆われていますが、この風穴はその溶岩の中にできた洞穴です。石灰岩の鍾乳洞とは違うものの、何らかの作用で空間が形作られています。明らかに天井から崩落した岩も見られます。もしかしたら、水の浸食、または火山ガスの浸食……などの話題も参加者の間では交わされました。

地下の空間である風穴は、内部気温は13度ともいわれています。20度以上の地上で暖かい気持ちでいた参加者も、暗がりに降り立ってから上着を取り出して着用するほどでした。

富士山は、広大なすそ野を持っており、富士山への降水は、ふもとでは湧水となっています。三島・清水町、御殿場、また、富士・富士宮。北では山梨・忍野も富士山の湧水と考えられるのでしょうか。

富士山と、湧水の現象……静岡ならではの自然風物として、これからも注目すべきテーマだと思われました。

静岡県の水生生物 (11)

ボウズハゼ

板井隆彦



ボウズハゼは夏の魚である。川がアユ釣りでにぎわう頃になると急にこの魚が目立つようになる。しかし釣りをしても簡単には釣れないから、一般の方がたにはなじみの薄い魚かもしれない。

このハゼは日本列島でも黒潮など暖流の影響がある地域の川に見られ、静岡県でも伊豆半島などにはとくに多いので、南方系の魚の代表のようにもみえる。しかし、静岡市の興津川や波多打川をここ10年以上のぞき続けてきた筆者には、この魚がこれらの川では急激に少なくなっているように感じられるのである。温暖化が指摘される昨今では、暖水系の魚は増加しこそすれ減少することなどありそうもないように思えるのだが。

ボウズハゼは中型のハゼ科の魚で全長15cmになる。体は円筒形でやや細長く、頭部の断面は四角形に近い。頭部は吻部から前頭にかけてよく膨らみ、和名はこの形状にちなむとされている。川のおもに中流域で生長して夏に繁殖し、孵化仔魚はいったん海に下り、翌春に溯上するいわゆる両側回遊魚である。春先、河口から群れとなつてのぼってくる稚魚は全長3~4cmほどの透明な魚で、シロウオの生息する地域ではしばしば混同される。溯上するうち10本ほどの暗色横帯をもつ灰褐色の体色となり、中流域までたどり着いて生長した個体はアユの体色に似たオリーブ色を帯びて横帯は薄れる。

このハゼの溯上力は大きく、垂直の岩や堰堤のコンクリート面なども水気さえあれば平気で這いのぼる。溯上には口と腹緒吸盤を用いるが、手のひらにのせてひっくり返しても落ちない腹緒吸盤の吸着力には目を見張るものがある。この腹緒を内側から見てみると、円形で上方に血管が集まった一文字の赤い線が見えるが、吸着力の持続に働いているものと見られる。

川では中流域の流れの速い早瀬の比較的大きな石の表面などに貼り付いて、下面に開く口の上あごの歯で石面の付着藻類をこそぎとって食べて生活する。生息場所、食物がアユと同じで、ボウズハゼの生息が比較的多い伊豆半島の狩野川などでは実際にアユの友釣りで本種が良く掛かる。掛かると本種の底石への吸着力があまりに強く、釣り上げられず、逆に釣り糸が切れておとりアユが取られてしまうことさえ生じる。そのため「アユトリカンジー」とか、まるでスッポンのように雷が鳴るまで離さないとして「カミナリカンジー」との名を付けられて畏れられている。

夏に繁殖に入った頃は、雄は黒みを帯びた体色となり、大きな浮石や沈み石のまわりを縄張りとして保持し、近づいた他の雄魚を追い払うようになる。そして石の裏面に巣作りをして雌魚を呼び込んで産卵させる。卵はごく小さく房状に生みつけられる。ほとんどのハゼは一層に産みつけるので、一目で本種の卵と分かる。しかしこの魚が少なくなった静岡市の興津川や波多打川では近頃はこういった卵も全く見つからなくなっているのが気がかりである。

静岡県の昆虫 (15)

ノコギリハリアリ

<アリ科ノコギリハリアリ亜科>

加須屋 真



ノコギリハリアリ（体長約4mmの働きアリ）

富士常葉大学にて、2008年12月15日撮影



頭部の拡大

アリの中で何が好き？と言われれば、私は断然ウロコアリとハリアリの仲間！と答えます。そのハリアリの中でもノコギリハリアリは、私にとって「ぜひとも採集したいアリ」のひとつでした。なにしろ頭の先にはクワガタを思わせる大顎があり、その特異な姿が興味深かったからです。現在ほどアリの研究が進んでない頃には、本種の生態もあまり解明されておらず、たまに採集されると「これは日本で何番目の採集」などといわれるほど採集例が少なかったようです。最近では研究が進み、各地で採集されるようになりましたが、それでもあまり普遍的ではないようです。

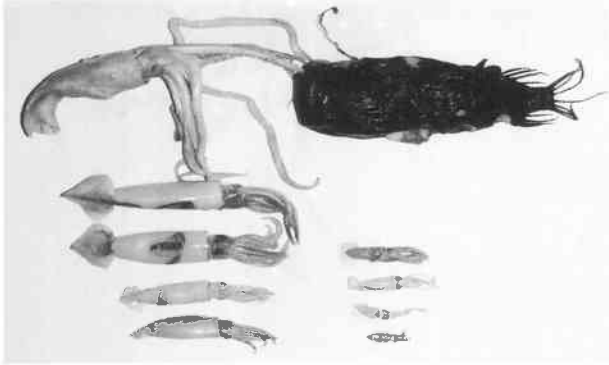
私が初めてこのアリと対面したのは2006年でした。林に入り土を掘り起こして、採取した土を篩にかける瞬間は、今日は何が採れるのかと、毎回まるで宝探しの気分です。秋の日が傾いて、ただでさえ暗い照葉樹林では、そろそろ今日の採集も終了という時に、採集した土を篩でふるっていたら、ポトリと落ちてきたのがこのアリでした。その時は図鑑で見ていた不思議な格好をしたアリが、本当に目の前にいて、かなり感激をしました。その後、静岡県内でも御殿場市、富士市、富士宮市で採集することができました。

さて、ノコギリハリアリを含めたハリアリの仲間は、そのほとんどが生活の中心が土壌内にあり、通常あまり地表を歩き回ることがありません。シイやカシなどの照葉樹林やクヌギやコナラなどの落葉広葉樹林の中で、落ち葉の下のフカフカの腐葉土や朽木の中などに生息しています。樹木がうっそうと繁った暗くて湿度の高い森林は、生物が少ない静かな森のように思えます。しかし実際は、このような環境の土壌中には多くの生き物たちが豊かな世界を形成しています。ハリアリはそこに棲む微小な土壌動物やその卵などを餌にして生活しています。暗い土壌中に棲息するハリアリの眼（複眼）は小さく、退化しているものが多くて、その代わりに触覚や嗅覚が発達しています。互いのコミュニケーションや餌の採集など、生活のほとんどをこの2つの感覚器官に頼っています。そしてもうひとつの特徴は「ハリアリ」の名前のとおり、腹部の先端に針をもつことです。アリの仲間には、ハリアリ以外にも針をもっている種がありますが、これはアリがハチの仲間であり、ハチの仲間から進化してきたことを示しています。

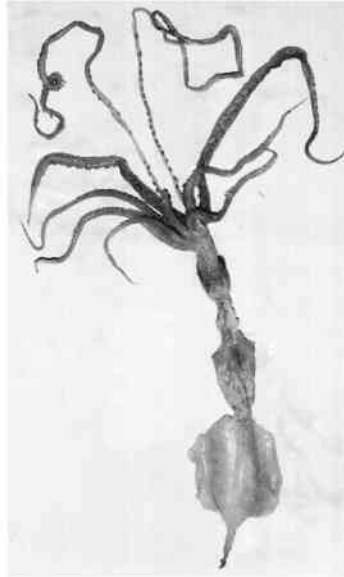
最近では人工林の増加や竹林の拡大、侵入などにより、照葉樹林や落葉広葉樹林が減少したり、手入れが行き届かないため、荒れた林になったりということが目立つようになりました。こういった森林環境の変化は、土壌生物たちの生息に影響を与え、そこに生息するハリアリ類にとっても棲みにくい環境になってきているようです。

ミズウオの貪欲な食生活 (その2)

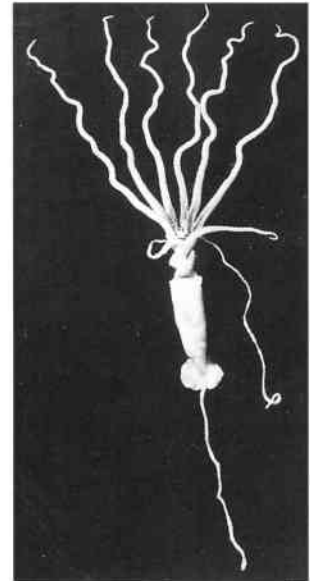
久保田 正



いろいろなイカの仲間とチョウチンアンコウの1種 1968年2月10日打ち上げ (BL:998mm) の胃から



中・深層性種のユウレイイカ 1968年3月28日打ち上げ (BL:1125mm) の胃から



中・深層性種の珍しいオナガイカ 1971年5月2日打ち上げ (BL:795mm) の胃から

ミズウオの生活で最も注目すべき点は、その食性にあります。それを端的に表しているのは本種の学名に付けられた「鱗のない凶暴なトカゲ」という意味です。丸呑みにした胃内容物には捕らえた時や呑み込んだ時に付いた無数の歯の傷があり、ほとんど未消化なので種のレベルまで同定できます。餌生物のさまざまなものを捕食しており特別な選択性はみられず、その海域の動物社会の構成を反映しています。これらの捕食状況はどの海域でも同じ傾向です。今回は胃内に見られた軟体動物頭足類のイカ類とタコ類について述べます。

最近までの調査によれば、胃内にみられた種レベルまで同定されたイカ類は10科15種そしてタコ類は2科2種であり、次のような種です。イカ類は、ギンオビイカ、ミミイカ、ヒメイカ、ジンドウイカ、ケンサキイカ、ヤリイカ、ヒロビレイカ、ツメイカ、テカギイカ、クラゲイカ、シラタマイカ、ゴマファイカ、スルメイカ、ユウレイイカ、オナガイカなどです。タコ類は、クラゲダコとカイダコです。

これらのうち最も多く捕食されていたのは、外套長が8~284mmのスルメイカで全個体

数の約52%を占めています。次いでテカギイカとユウレイイカと続きそれ以外の種では少なく1~6個体でした。現在駿河湾には沿岸性種、黒潮の影響による亜熱帯外洋性種、中深層性種、親潮潜流による亜寒帯性種など4目25科50属85種の分布が記録されています。多くは遊泳性種ですが中には浮遊性種が含まれています。

1971年5月に駿河湾の興津海岸に打ち上げられた個体は変わったイカを捕食していました。その当時このイカは8個体すべてが大西洋域から記録されていて、この発見が9番目の記録であり、太平洋域からの初記録でもありました。その後本種は写真のように外套膜後方に紐状の長い“尾”部があることにより「オナガイカ」と命名されました(右上写真参照、触腕の1本が欠落)。

澤田 威氏海藻コレクション

杉野孝雄



サガラメ



カワノリ

澤田 威氏のア藻標本約 2500 点が静岡県に寄贈されることになりましたので紹介します。

澤田 威氏は静岡大学文理学部で生物学を専攻、昭和 29 年に卒業後は、中学校の理科教員として、定年まで勤められました。生徒に海藻の名前を聞かれて答えられなかったことがきっかけとなって、海藻の研究を始められたとのことです。範囲を興津から御前崎間の駿河湾西岸にしぼって研究をされました。

研究の成果は「駿河湾西岸と海藻」(1991 年)、「藻食民族の文化 (1996 年)」、「駿河湾西岸の海藻」(2000 年) の 3 部作としてまとめられています。その後、「駿河湾西岸を主とした原色海藻図鑑」の発刊に精力的に取り組まれ、8 年の歳月を費やし 2008 年に自費出版されました。寄贈された海藻標本はこの図鑑を作成する基礎になった標本です。

寄贈された標本は種名を同定し、1 点ずつ台紙に貼りラベルがつけられた、海藻の原色がそのまま残っている立派な標本です。上記の「原色海藻図鑑」に依ると、駿河湾西岸には、緑藻綱 43 種、褐藻綱 60 種、紅藻綱 197

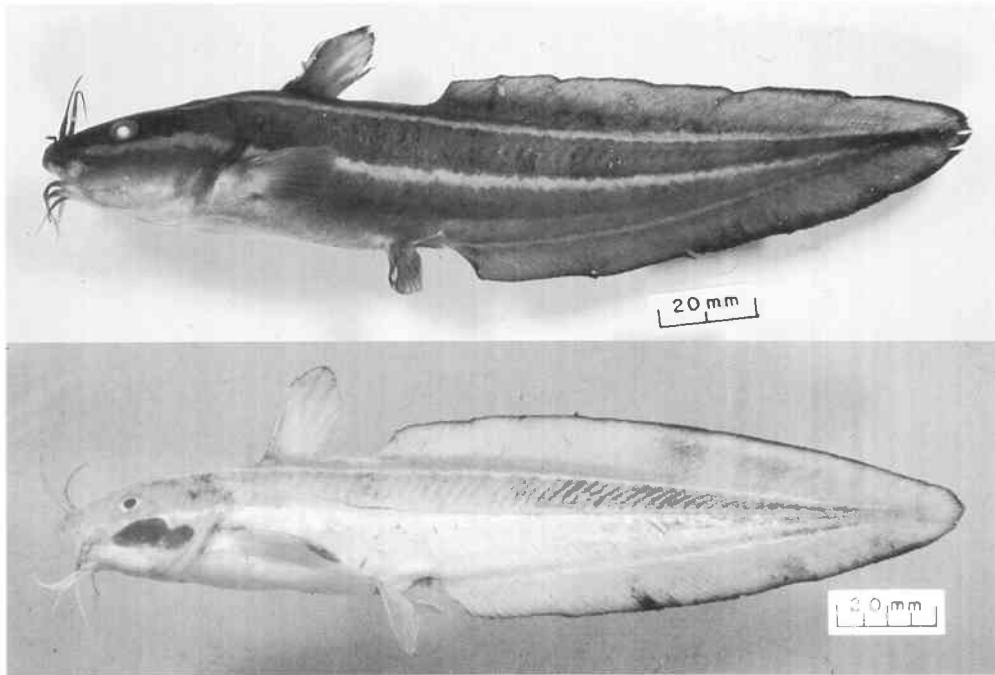
種が分布しているとのこと、その全種が寄贈標本にあります。種名の同定は御自分でされると共に、疑問のある標本は専門家に同定をお願いし、正確に記載されているので、駿河湾西岸の海藻フロアを知る重要な資料です。

植物の種名を調べる場合は一般には、図鑑などで調べますが、図鑑では十分に説明されていない特徴もあります。しかし、図鑑で概略種名を特定し、さらに実物である標本と比べれば、正確に同定することができます。寄贈標本には普通に見られる種や類似種も含まれているので、市販の図鑑と併用することで、身近な海藻を同定することのできる資料にもなると思います。

写真のサガラメは相良の地名のつけられた、アラメに似ているコンブ科の褐藻で、御前崎から紀伊半島に分布し、食用として利用されます。カワノリは海藻ではなく、川の石に付着するカワノリ科の淡水藻です。今では貴重になった緑藻で、これも食用になります。海藻と共に安倍川流域の淡水藻の標本も含まれています。

見慣れたゴンズイが実は新種だった

岸本 浩和



上段：ゴンズイの Paratype, NSMT-P 72977, 175.0 mm SL, 駿河湾内浦沿岸産。

下段：ミナミゴンズイ, IORD77-793, 170.7 mm SL, 八重山諸島西表島産。

ヒトと同じ陸上に住む脊椎動物の哺乳類は基礎的な研究はほとんど完成しており、今さら現存する新種の報告などめったにないことです。ところが、もっとも原始的脊椎動物と考えられている魚類では、年間平均 200 種以上の新種報告がなされています。新種で数が増えるだけではなく、別種とされていたもの同士がのちに同一種と判明して種数が減ることすらあり得ます。そうした増減の結果は Nelson (1975-2006) によって集計された世界の魚類現存種数 18,818 種 (初版)→21,730 種 (1984 年)→24,618 種 (1994 年)→27,977 種 (第 4 版) に良く現れています。

これは生物が種分化を起こして種類が増えるのではありません。水生生物、とりわけ海の生物はヒトの住む世界とは違うので、生物分類という基本的研究が行き渡っていないという事実には他なりません。海産生物は脊椎動物でさえこのありさまですから、膨大な数に上る無脊椎動物では計り知れない数の未知なる動物が潜んでいるはずで

す。身近な日本の海にもご多分に漏れず、未知の魚類はたくさんあります。日本魚類学会

から 2007 年と 2008 年に発行された英文専門誌には日本から新種報告された種だけでも 7 種 1 亜種あり、他誌もくまなく調査すれば、新種報告がない年はないでしょう。初記録種なら毎年必ずあるはずで

す。表題のゴンズイは東北地方以南に広く分布し、誰もが知っているごくありふれた魚ですが、実は新種だったのです。琉球大学の吉野哲夫さんと私が共著で昨年の 6 月に発表したばかりです (Yoshino and Kishimoto, 2008)。なぜそんなことが起こるのか? といいますと、生物には世界でただ一つの呼び名、すなわち "学名" を与えることはご存じのはずで

す。それはラテン語かもしくはラテン語化された各国語がアルファベット表記されたものですから日本語ではありません。しかし、日本の魚には日本の標準和名が先に付けられていることが多いので、それに一致する学名をあとから探し当てることとなります。この作業を種の同定 (または査定) といいます。適切な学名の魚が見つからなければ新種ということになるのですが、ある標準和名を持つ日本の魚を外国産の良く似た別種と同一種と勘違いし

て、両種の学名と標準和名を組み合わせってしまったことが、研究不十分な時代にはありがちなことです。しかし、現在の知識でも将来には研究不十分と判断されてしまう恐れもあるのです。時代と共に研究が発展してこのような過去の過ちが判明した時点で標準和名の魚が漸く新種記載されるという事態が生じるのです。ゴンズイ *Plotosus japonicus* Yoshino and Kishimoto, 2008 はまさにその例でした。ただ、学名通りの魚 *Plotosus lineatus* (Thunberg, 1787) も沖縄以南には生存することも分かったため、そちらのほうにはミナミゴンズイという新たな標準和名を与えました(岸本・吉野, 2009)。

新種記載に当たってはその証拠品となる標本をタイプシリーズ(かつては模式標本とか基準標本などと和訳されていた)として、専門の研究機関や自然史博物館などに永久保存することが勧告されています。タイプシリーズのうちただ一つの標本にはホロタイプという特別な価値が与えられるので、それはその時点で世界に唯一の標本となります。貴重な価値を与えるタイプ指定が著者の一人である私にはできたので、もし、静岡県に公立の自然史系博物館があったなら、ホロタイプでもパラタイプでも、供託することはできたはずです。残念ながら、建設の約束もできてない現状では静岡県自然史博ネットワークには

タイプ標本を供託するわけには行かなかったのです。ゴンズイの新種記載ではホロタイプに国立科学博物館の標本を指定し、そのほかのタイプシリーズ(パラタイプ)には各地の自然史博物館や大学の博物館の標本として指定せざるを得ませんでした。

静岡県内で生物の分類学的研究を行っているのは私以外にも居るはずですが、現に東海大学にも居ます。どの分類群の研究者であっても、我々に共通の悩みは新種記載に当たってタイプシリーズを供託できる身近な公立博物館がないことです。世界に唯一となる学術的に価値の高い標本が(間違っても、資産価値を与えるべきものではない)どれだけあるかということは、その県の自然科学的理解度のバロメーターとも言えるのです。静岡県に一刻も早く自然史博物館が設立されることを願って止みません。

引用文献

- 岸本浩和・吉野哲夫. 2009. 日本産ゴンズイとミナミゴンズイ(新称)に関する追記. 魚類学雑誌, 56(1): 印刷中.
- Nelson, J. S. 1975-2006. Fishes of the World. 1st-4th eds. John Wiley & Sons, Inc., Hoboken, New Jersey.
- Yoshino, T. and H. Kishimoto. 2008. *Plotosus japonicus*, a new eeltail catfish (Siluriformes: Plotosidae) from Japan. Bull. Natnl. Mus. Nat. Sci., Ser. A, Suppl., 2, 1-11.

黒川自然観察会

横山謙二

5月10日に毎年行っている静岡昆虫同好会との共催の黒川自然観察会を行いました。当日は天気に恵まれ、大型連休の最終日ということもあり、40人程のたくさんの方が、観察会に参加がありました。午前中は昆虫、午後は主に水生生物の採集を行いました。

素人からベテラン、小さな子供から大人まで、みんなで採集活動を楽しむ姿が見られた非常に楽しい観察会でした。これからも、こうした楽しい観察会を増やしていけるよう努力していきたいと思えます。



林道沿いで昆虫採集をする